

広報誌

ペケレベツとは

アイヌ語で「明るく清らかな川」を意味しており、清水町の由来となっています。



ペケレベツ



院長新年挨拶 トピックス

日赤医学会表彰
忘年会の余興に参加して
医療安全川柳
心不全療養指導士受験を終えて
私はこんな仕事してましたシリーズ

人事消息
理念・基本方針
編集後記

撮影場所：清水町
撮影者：首藤 竹司
中島 美穂



「開院80年の2025年を迎えて」

病院長
藤城 貴教

2025年問題が叫ばれて久しく、すでに医療現場や運輸業界における働き方改革は進み我々医療人の在り方も大きく変化している。DXはますます加速、外国人労働者の登用も始まり、言語、文化、生活に異文化共生が必須となった。ただ農業や製造業の分野では早くから技能実習制度が取り入れられ、街角や農村部でアジアからやってきた人たちの活躍を目にする機会が多いことを考えれば日本の医療業界はまだ保守的であることは否めない。

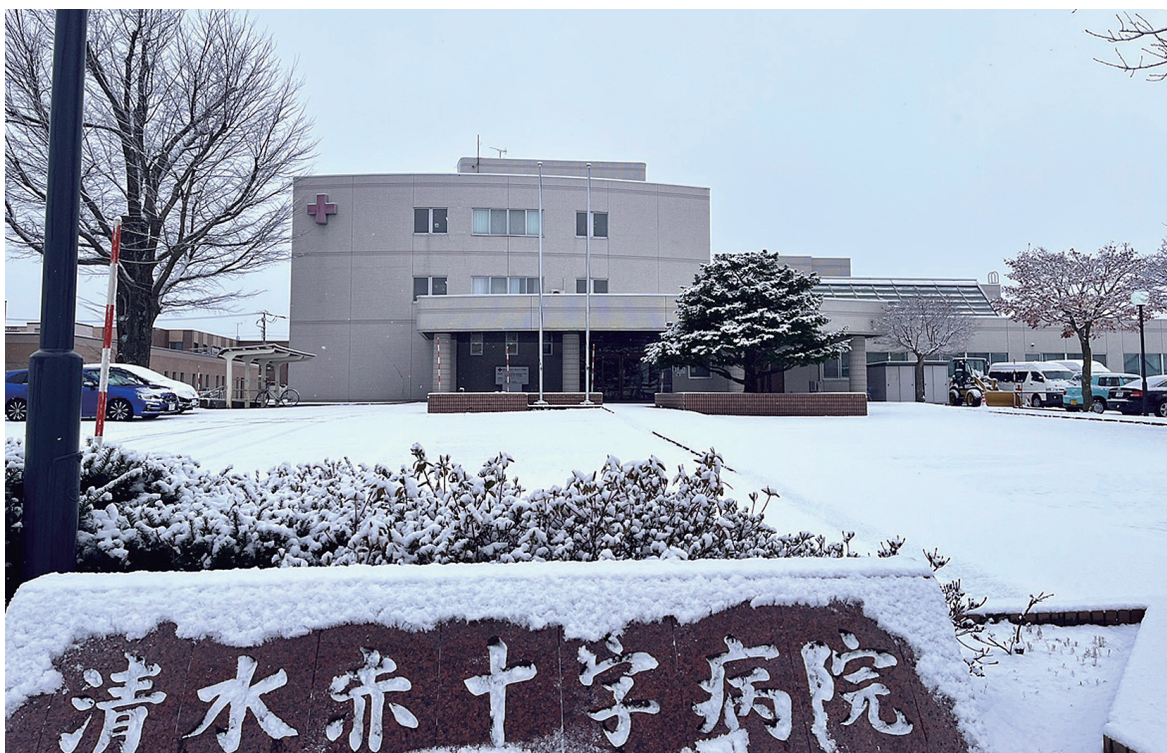
今年は当院も初めてアジアの“隣人”である外国人労働者のご協力をいただく。

2025年、更にはその先2040年に向けた医療改革は国が策定した目標こそあれ現場の体制が追いついていないのが現状である、それはなぜであろうか？答えの一つは“実行するスピード”とこれに費やすエネルギー量の不足であろうと思う。“PDCAサイクル”は有名な業務遂行のスタンダードであるが、政府が作った計画(Plan)を実行(Do)するのは我々自身であり最も大切なのは成すべきことを迅速に進めることである。これは借金を返済することに似ており、時間が経つほどに利息が増え元金の返済が難しくなるし気が重くなる。

ではこのエネルギーはどのように生まれるのであろうか？一つは日々の業務の質の向上あるいは刷新で、具体的には日常業務にPDCAサイクルを確実に回し今日より明日の質を少しずつ上げることであろう。“業務改善”の達成感はいつしか明日へのエネルギーに変わるはずである。そのためにも組織を一つのチームとしてまとめ、同じ方向を向いて前進することが求められる。また、古代中国の荀子はこう言っている、“まず礼を体得すべし、礼が守れぬものは法も守れない”。日頃の挨拶や礼儀が組織運営の未来を決めるのである。

勇気と無謀は紙一重、物事を進める時には迅速であるべきだが拙速ではいけない。当院も傘寿を迎え人間で言うと老境に入っているが、病院や医療提供体制は常に新しくあるべきで、今年の干支である蛇のように脱皮を繰り返して成長していくことが求められる。

地域医療は、この土地に人間が住み続ける限り今日も明日も“隣人のため”にある。





日赤医学会表彰

事務部

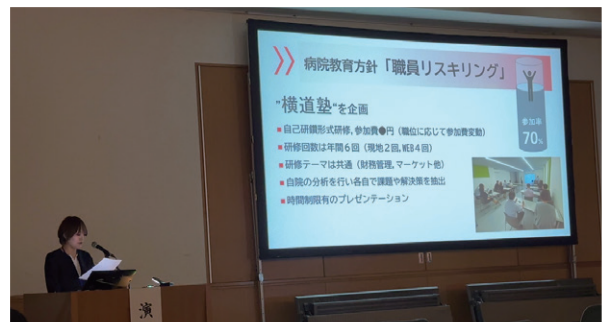
係長 山本 一幸

令和6年10月16日から18日にかけて、第60回日本赤十字社医学会総会に参加しました。自身としては、初めての学会であり、全てが新鮮で、程よい高揚感の中、各施設の様々な職種による医療への取り組みを学び、自身もAI技術を活用したレセプトチェックシステムの導入効果を発表しました。発表には多くの関心をいただき、立ち見が出るほどの聴講者が集まり、口演後には他施設の方から多くの質問や意見をいただくことができました。

また、他施設の若手職員が課題を分析し、将来を見据えた取り組みを分かりやすく発表する姿を拝見し、時代の変化を肌で感じました。この経験を通じて、全国のトレンドや標準を知り、当院の立ち位置を把握し、進むべき道を考えるヒントを得ることができました。

コストカットは手段の一つに過ぎず、同時に投資も必要であり、将来を見据えた絶え間ない人材育成や医療DX推進の歩みを止めては、いずれ当院も日産のような命運を辿ってしまうかもしれません。

今後は次世代を担う人材の育成や魅力ある職場作りに力を入れ、引き続き学会で発表できるような医療DXの取り組みを進めてまいります。



10月下旬に、突然、山田圭吾先生から秘密の話があると呼び出されました。何のことかともものすごく緊張した覚えがあります。

11月後半から圭吾先生作成の台本読みが始まり、なかなかの本気度を感じました。

私の役割は座布団運びだけだと思っていたので、気楽に参加できると思っていたのですが……。

他のメンバーよりも台詞は少ないのですが、なかなか覚えられず、舞台上しゃべると思う緊張も結構ありました。

リハーサルまで行く圭吾先生の力の入れようにつられ、準備は着々と進みました。

出演時、赤いTシャツと座布団を持って舞台に出るだけで笑いが聞こえてくる、笑点のコンテンツの強さを実感しつつの座布団運びでした。

メンバーの頑張りもあり、楽しく参加させてもらいました。でも、次回は観戦する側がいいかな……。



医療安全川柳

12月20日、昨年同様忘年会の際に各賞の発表が行われました。個人の名前は伏せた状態で純粋に作品の出来栄のみで選出されました。しかし当日不参加だった方が表彰された場合は次候補の職員が受賞する形式になり受賞者全員が「医療安全推進室賞」となりました！これからも医療事故を防ぐ意味でも気を引き締めて業務を遂行していきましょう！！



1. 声掛けは 未来のミスを 消す魔法 村谷 拓
2. 減らします 多剤内服 転ぶもと 上神田 憲男
3. 「ふてほど」と 言わせないケア 心掛け 石井 康浩

心不全療養指導士受験を終えて

検査技術課
安保 詩織

心不全療養指導士の認定試験を受験しました。勉強すること約3か月。心不全療養指導士ってなんだろう？どんなことをするのか？スマホ片手に調べるところからのスタートでした。

日本における心不全の罹患者数は約120万人。2人に1人がかかるとされる癌の罹患者数100万人と比較しても多くの方が苦しんでいる病であり、重症になると予後も悪いとの情報にびっくり。自分自身、他人事のように思っていたことも相まって、心不全療養指導の重要性を実感しました。

今回の試験を通じて、治療過程など検査以外の分野についてもおおくの知識を得ることができ、これまでの業務を見直す良い機会となりました。

今後の活動としましては、検査データだけに頼るのではなく、患者とのコミュニケーションを深め、個々に適した療養指導を提案できるよう努めたいと考えております。

勉強会の開催など、北見赤十字病院の谷口先生はじめ多くの方にお世話になり、無事に試験を終えることができました。ご協力頂きました皆様に心より感謝申し上げます。



施設科からの脱出

「夢達成しちゃったな。これからどうしよう？」

1992年3月、渋谷から料金先払いだと知らず運転手に支払いを急かされながら循環バスに乗り世田谷公園前で下車した後、公園を横断しこれから3年間過ごすことになる自衛隊中央病院に初めて足を踏み入れた時の僕であった。

東京に出ていく前、僕は北海道にあるとある施設大隊ナンバー中隊に所属していた。この部隊は地雷や橋などを敷設や破壊、普通科(=歩兵)隊員などをボートに乗せ夜間隠密に渡河させるといった縁の下の力持ち的な職種であった。北海道の部隊であるので冬期間は山野をスキーで行動出来る事が必須で、別府出身の僕にとってはプレッシャー以外の何物でもなかった。施設科から合法的に抜け出すには何か方法はないか？と悶々としていた頃それまで10年間衛生科隊員しか受験出来なかった放射線技師養成所が国試不合格者を毎年輩出するようになり存続の危機が危ぶまれ全職種に受験の門戸開放が再開された最初の年であった。そこで駐屯地医務室に出入りするようになり技師の方に過去問を取り寄せてもらったのだが高校時代文系就職組の僕には64小銃の角度や初速から着弾地までの距離を計算する問題が解けるわけもなく泣き付いたのが当時僕の所属中隊に来たばかりの防衛大学出身若手幹部であった。相談した時、僕とこの幹部の方は関東にある「施設学校」に時を同じくして教育に参加していたのであった。しかし、ここで問題が発生する。「僕ね～、防大の文系出身なんだよね。だから物理とか苦手なんだよね。」

“えらいこっちゃ(´▽`) (´▽`)シあかんやんか”である。この期に及んで解いてもらえないなんて……。しかしこの若手幹部の方は「同期で理系の奴いるから解いてもらってあげるよ！」“おおお願いします(๑•̀ロ•́)敬礼”藁をもつかむ思いで過去問を渡し1日待ち、2日待ちしてもなかなか返ってこない……。1週間してもまだ来ない。自分の教育期間も終わりに近づいて来る。“(´▽`;)ヤ……

ヤ、何とかしないと。そうだ、500のビール6缶持っていこう！！”ついに業を煮やした僕は買収に出たのである。翌日、理系防大若手幹部の方は丁寧な解説付きの回答集を渡しに来てくれた。成功である。この日から施設科脱出に向けた猛勉強が始まったのである。

教育期間も終わり無事3等陸曹(米軍で言うと軍曹クラス)に昇進しこれから施設科隊員として経験を積み、所属中隊に貢献しなければならない時であったが僕はとにかく学科試験をパスすることしか頭になかった。

1991年9月位であったらうか、1次試験も無事終了した後に相談に乗って頂いていた医務室の放射線技師の方から「点数良かったみたいだよ。」と言われ、「面接??誰に相談しよう??誰がいるか?班長は好意的でないし……。小隊長はどうだ?あの人なら良くしてくれてるし幹部だから面接指導も慣れてるよね?」

困った時に助けてくれる時ほど有難いこ



とはない。今でも覚えているのが、ちょうど中国で天安門事件が起きこれを題材にして面接の練習をしたのだが、民主化を求めるデモ隊に対し、中国人民解放軍が実力行使したことはどう思うか？と聞かれたのだが、当時の僕は「国の指示だから仕方ないのでは？」と思ったのだが小隊長は「軍が市民に武力行使するのは本当に最後の時だ。これからの中国がどう向かうのか非常に心配だ。お前もそう思わないか？」と指導を受けた。今の中国を見ていると小隊長は予測していたんだな、と感じている。

面接試験当日、北海道を統括する北部方面隊のある札幌駐屯地に向かい、試験が始まった。実際は20分程度だったと思うのだが自分の感覚では40分以上に感じられた。色々質問されたのだがその中で「技師免許を取得した後で自衛隊を退職する隊員がいるがそのことについてどう思うか？」との質問に「そんなのは愚の骨頂だと思います！！」と回答し無事合格通知を受け取る事が出来た。その後退職してしまうのだが・・・。

その年秋の演習で、副分隊長として最後の演習に参加したのだが幌の付いた3t半トラックに乗って演習場で揺られながらこう考えていた。「もう演習来るのも最後だな。これでやっと戦闘服を脱ぐことが出来る。」感慨深く酔いしれていた。

冬に入り運がいいことに大型自動車免許取得の課程に入る事ができ、普通車過程を経ずにとる事ができた。免許を取得してすぐに技師学校へ入校だったので大型免許を使う場面もなくペーパードライバーになってしまった。

部隊の先輩方には「そんなに施設科いやだったか？」とか「俺も学科試験は受かってたんだけど2次試験が受からなかったんだよな・・・。いいよなお前は。」などと言われながら施設科の所属中隊を後にし晴れて自衛隊中央病院の営門をくぐったのであった。

なんだか昔を思い出しながら書いてしまいましたが、広報委員長を降りる時には自分のことを書こうと思っていたので充実感を得ることが出来ました。(自己中な文章で申し訳ありません・・・。)

ME 中田課長から引き継ぎ早や6年が経過してしまいましたが当初はどうなるかと思いましたが年4回の発行は欠かすことなく完遂出来たのは僕の依頼に応じて原稿や写真などを提出していただいた院長以下職員の皆様のお陰です。本当にありがとうございました。これからは僕以上に清野新広報委員長への協力お願いいたします。



人事消息

医師派遣 福岡赤十字病院

10月1日(火)～10月15日(火) 井上 重隆
10月16日(水)～10月31日(木) 小林 毅一郎

内科専攻医 愛知医療センター 名古屋第二病院

10月1日(火)～10月31日(木) 岡田 祐佳
11月5日(火)～11月29日(金) 真野 悠太郎
12月2日(月)～12月27日(金) 岩瀬 泰英

臨床研修医 姫路赤十字病院

10月1日(火)～10月31日(木) 武内 恵太

仙台赤十字病院

11月5日(月)～11月29日(金) 中村 光
12月2日(月)～12月27日(金) 藤原 瑠央

愛知医療センター 名古屋第二病院

9月30日(月)～10月25日(金) 早稲倉 峻真
10月28日(月)～11月22日(金) 井篁 里奈子
12月2日(月)～12月27日(金) 磯村 リリカ

深谷赤十字病院

9月30日(月)～10月25日(金) 川澄 駿

旭川赤十字病院

11月5日(火)～11月29日(木) 田中 亮次

医学生

旭川医科大学	10月	2名
	11月	2名
	12月	1名

編集後記

皆様、新年あけましておめでとうございます。今年もよろしくお願い致します。
来年度より広報委員長となります医療技術部リハビリテーション科の清野です。皆様にもご迷惑をおかけする事もあると思いますが、前任の首藤さんにも相談しながら広報誌の作成に取り組めたらと思っております。また、広報誌の記事では皆様に引き続きご協力を頂きながらの作成をさせて頂きたいと考えています。今後ともよろしくお願い致します。

リハビリテーション技術課 清野浩平



❖ 編集・発行責任者：佐藤 秀美 ❖ 編集委員長：首藤 竹司 ❖ 発行元：清水赤十字病院

❖ 印刷：東洋株式会社

〒089-0195 北海道上川郡清水町南2条2丁目1番地 TEL 0156-62-2513 FAX 0156-62-4460

URL <https://www.shimizu.jrc.or.jp/> MAIL contact@shimizu.jrc.or.jp